

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 第 1177 号	氏 名	砥 石 政 幸
論文審査担当者	主 査 本 田 孝 行 副 査 小 泉 知 展・花 岡 正 幸		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>Vessel Sealing Device (VSD) は既に種々の胸腔鏡下手術において使用されているが、ヒトの胸腔鏡下肺葉切除術において VSD 非使用と比較し、その安全性や有効性を立証した報告は少ない。そこで砥石は胸腔鏡下肺葉切除術における VSD 使用について前向きに検討した。</p> <p>2011 年 4 月から 2013 年 3 月まで、信州大学呼吸器外科で、原発性肺癌に対する胸腔鏡下肺葉切除術及び 2 群リンパ節郭清を予定された患者を対象に、VSD 使用群 (EnSeal 群、LigaSure 群、Harmonic 群の sub-group) と VSD 非使用群 (control group : 結紮と従来の電気メス使用のみ) に割り付けを行い解析した。主要評価項目は VSD または結紮で処理した肺動脈断端の破綻圧 (切除標本を用いて測定)、手術時間、術中出血量、自動縫合器の使用回数、術中の術者ストレス、術後ドレーン排液量、術後ドレーン留置期間である。各 VSD 使用群間における上記項目の比較も行われた。</p> <p>そこで砥石は次の結果を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 解析対象は VSD 使用群 44 例 (EnSeal 群 17 例、LigaSure 群 15 例、Harmonic 群 12 例)、VSD 非使用群 14 例であった。各群の症例背景に有意差は認めなかった。</li><li>2. 肺動脈切除断端破綻圧は、VSD 処理断端 <math>309 \pm 193</math> mmHg に対して結紮処理断端は <math>1,142 \pm 486</math> mmHg で、結紮処理断端の破綻圧が有意に高かった。</li><li>3. 5 mm 未満の VSD 処理断端の破綻圧は、5 mm 以上のそれに対して有意に高かった。</li><li>4. いずれの群、及びいずれの血管径における破綻圧も、生理的肺動脈圧に十分に耐えうる強度を有していた。</li><li>5. VSD 使用群は有意に術中出血量を減少させ、術者ストレスを軽減し、術後ドレーン排液量を減少させ、術後ドレーン留置期間を短縮した。</li><li>6. 各 VSD 使用群間の比較では、全ての項目で有意差を認めなかった。</li><li>7. 本試験に enrollment した患者に重篤な周術期合併症、手術関連死亡はなかった。</li></ol> <p>以上より、原発性肺癌に対する 2 群リンパ節郭清を伴う胸腔鏡下肺葉切除術において、VSD は安全で簡便に使用できると考えられた。</p> <p>主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			